

ピグーにおける倫理学と「厚生」の概念の再検討

山 崎 聡

1 はじめに

本稿は、ピグーの「厚生経済学」に関連する思想的、倫理的考察である。厚生経済学の基本的構想に関する、シジウィック経済学の影響については既に幾つかの文献において取り上げられているが¹⁾、何れも経済学的アイディアや命題の類似性といった論点に議論が集中されている。シジウィック、ピグー両者の関係が、経済理論という観点からのみ考察されていることに対して不十分さを覚えることに端を発し、筆者は、両者の関係を思想的（より正確に言えば倫理的）に考察することを思い立った。そのような目論見を視野に入れつつ、先ず、本稿ではピグーの倫理学とその経済学との関連を追窮する。論点は次の二点になろう。

第一の点は、そもそもピグーにおいて倫理的理論なるものが存在したのか、したとすればそれはどのようなものであり、如何なる学説、人物の影響を受けているのか、ということをも可能な限り明らかにすることである。この点に関する先行研究は殆ど皆無に近く、筆者の知る限り、恐らく Shionoya (1993)²⁾を除いては他に存在しないものと思われる。ピグーによる倫理学に関する体系的論述が存在しない事実を鑑みれば、それは当然であったかも知れない。しかしながら、従来、経済学者たちからは殆ど無視されてきた貴重ともいえる哲学的文献がピグーには存在し、論点を先取りしてしまうと、実はこれらが彼の倫理学を解明する重要な手掛かりとなるのである。

第二の点は、ピグーの倫理学が彼の経済学にどのように応用されたかを解

明することである。だが、如何に応用されたといっても、ピグー自身が『厚生経済学』(1920)³⁾において「規範よりも実証」と述べていることから、その応用はごく限られた部分に過ぎないと推察される。その一つがピグーが積極的に用いた「厚生」(Welfare)という概念であると思われる。倫理学と経済学という異種のものが、ピグーの体系においては厚生という概念を媒介として関係づけられているといえよう。故に本稿では、これまでには考察されたことがない、ピグーによる「厚生」の概念の導入の由来を哲学的に追窮し、その経済学との融合の態を見極めたいと思う。加えて、これまでとかく混同され、または互いに同一視される傾向にあった「効用」(Utility)、「厚生」(Welfare)といった諸概念がピグーの体系においては明確に区別されるべきものであることも検証したい。

2 「効用」の定義

さて、「厚生」の概念の考察に先立って、本節ではピグーによる「効用」の定義に関する考察を行う。「効用」という概念自体非常に不明瞭なものであるが、伝統的な効用の定義の仕方を概観してみると、そこには、大きくいって二つの異なる観点が存在する。「快楽」観と「欲求」観の二つである。前者は効用を(例えば快や苦といった)意識の状態と見做し、後者はそれを(例えば選好のような)欲求が充足された状態だと見做す⁴⁾。

ピグーは、1903年の論文「効用に関する若干の論及」⁵⁾で、自身の「効用」観について叙述している。この論文は、後の厚生の定義との相違や、ピグー自身の倫理的立場を知る上でも興味深い。以下、その内容を見ていこう。

まずピグーは論文の冒頭で次のようにいう。「最初の問題は、明らかに、効用の定義と測定に関してである。ここで我々は、効用を快楽と同一視する論者とそうしない論者との間に大きな違いがあることに気づくであろう。ジェボンズとパッテン博士は、そのような同一視が可能であり、そうすべだということを考えているようであるが、フィッシャー教授はそれを拒否し、マーシャル教授に倣い、効用を欲求と関連づけて定義している」(SRU, p. 58)。

そしてピグー自身は、「……ともかく効用は主に欲求の尺度であることから、……効用を専らそのように定義することが最適であるように思われる」(SRU, p. 58)と述べ、「欲求」観の立場を支持する。即ち、需要価格を以て経済主体の財に対する欲求(の強さ)の尺度とし、同時にそれを、消費の帰結として生じる満足を測定する代替的指標と見做すのである。彼がそうする意図は、効用の測定に関する分析上の客観性を重視することにあるといえよう。

冒頭で上記のように述べた後、ピグーは一旦そのような問題を保留したまま、効用関数の構造や消費者余剰の問題などに議論を集中させてゆくが、興味深いのは論文の最後の叙述部分である。グラフで消費者余剰を示す部分を指し、「実際問題として、当然にもこれが示しているものは、効用の領域ではなく価格の領域である」(SRU, p. 66)ことを認めるが、一応仮定により、その領域が(財の消費によって充足されるべき)欲求の強さを測定しているとピグーは規定する。しかしながら、ピグーの問題意識はむしろ次のことに存する。それは、欲求の強さとそれを満たしたときに生ずる帰結的快樂との間に明らかな相関がある、という想定が真であるか否かということである。答えが否であれば、需要価格を欲求の強さと見做し、それにより満足の度合いを測定することは不可能となる。ピグーは、「しかしこの想定は明白に真であると解されるものではない」(SRU, p. 67)といい、マーシャルの「我々の目的にとって、これらの快樂は欲求と同義である」⁶⁾という言明を批判する⁷⁾。

しかしながら、倫理的に注目すべき点はこれに続くピグーの議論の展開にある。ピグーは次のように続ける。「心理的快樂主義の立場を取る論者にとっては、実際、〔上述したような問題に対しては〕何の苦勞もない。仮に、誰であっても、自分自身の快樂以外に欲求するものが究極的に存在しないのであれば、快樂へのあらゆる手段に対する我々の欲求の強さは、その手段によって生じると予測される快樂の量と相関するであろう」(SRU, p. 67)。

このことによってピグーは何を主張しようとしているのか。ベンサムやミ

ルたちのような心理的快樂主義者は欲求と快樂とを同一視する傾向があったこと、即ちミルによる「何かを欲求することとそれを快樂と見做すこと、また何かを嫌うこととそれを苦痛と考えることは、全く切り離せない現象であり、むしろ同じ現象の二つの部分であって、厳密に言えば、同じ心理的事実を呼ぶ二つの異なった方法である」⁸⁾という自然主義独特の論調に対してピグーは疑問を抱く。自然主義の論法では、欲求されていることが欲求されるべき(望ましい)ものであり、快樂が欲求されているという心理的事実を鑑みると欲求されるべき唯一のものが快樂=善に他ならないことが説かれる。これは後にシジウィックやムアらによって「自然主義的誤謬」として厳しく批判された論調である。ピグーは、「しかしながら、心理的快樂主義は、現在では多くの信奉者を有するような立場にはない。それは、グリーンのような理想主義者たちばかりではなく、最も偉大な近代の功利主義者、故シジウィック教授によっても、より決定的な影響を以て批判された立場である」(SRU, p. 67)といい、明らかにペンサムやミルの心理説を否定している。

それでは何故にピグーは心理説を否定したのであろうか。それはシジウィックの影響をピグーが受けていたからである。あまり知られてはいないが、ピグーはシジウィックの著作をかなり広く読んでいる。その中心はシジウィックの『倫理学の諸方法』(1874)⁹⁾である。その第1篇4章「快樂と欲求」を参照してピグーは次のように議論を展開する。「我々が欲求する対象は、快樂だけではない。……快樂に加えて他ものも我々は欲求するということが認められれば、我々の欲求の強さとそれらを満たした結果生じる快樂とが、必然的に互いに比例するとは最早いうことができなくなる。快樂を対象にしようと、他ものを対象にしようと、あらゆる欲求を満たすことは、当然のことながら一般的に快樂を伴う。しかし、その欲求が『利己心に囚われない』(disinterested) ときには、欲求の強さと快樂の量との間にコンスタントな〔比例〕関係が存在すると想定する根拠は存在しないように思われる。そのような場合において、……實際伴う……或いは伴うと予測されるものは欲求の充足である」(SRU, pp. 67-8)¹⁰⁾。ここから、「快樂を欲求する」とい

う観念をビグーが利己的なものとして解釈していたことが伺える。そうであるが故に、事実は別として、少なくともビグーの眼には、「欲求の唯一の対象は快楽である」と唱えていたベンサムやミルたちのような心理的快楽主義者たちが著しく利己的で偏狭であるように映っていたのであった¹¹⁾。何れにせよ、ビグーは、『厚生経済学』において快楽という名辞は使用せず、「満足」(satisfaction)という語を用いている。恐らく、厚生経済学には利己的なイメージを被せたくないという意図が介在していたためであろう。

ここまでを要約しておこう。以上の考察で確認できることは、次のことである。まず、効用の定義を巡る二つの立場に関して、ビグーは「欲求」観を採用している。従来は混同されてきた欲求と快楽とを峻別し、行為における欲求の強さと帰結的快楽の量との必然的相関性(比例性)が理論的にも経験的(心理的)にも存在しないことをビグーは明確に主張した。これは取りも直さず、彼がシジウィック(主に『倫理学の諸方法』)の影響を受けていたことの証しであり、同時にそのことは、ビグーが心理的快楽主義を否定し、自然主義に対しても距離をおいていたという倫理学的含意を内包している。このように効用に関する議論において、ビグーはシジウィックの倫理学の影響を受けているが、この論文が執筆された当時、未だムアの『倫理学原理』(1903)¹²⁾は世に登場していなかった。数年後ビグーは、論文「倫理学的論争における諸問題」(1907)¹³⁾で初めてムアについて論及する。更にその後『厚生経済学』(1920)の原型である『富と厚生』(1912)¹⁴⁾を出版するが、ビグーは、そこで効用ではなく、初めて「厚生」という名辞を採用すると共にムアについても再度言及しているのである。これらの事柄は、単なる偶然であろうか、それともビグーにとっては何か深い意味でもあったのであろうか。実は厚生概念の形成に際して、ビグーは、シジウィックではなく、ムアの倫理学の観念を批判検討した上で応用させていたのである。この興味深い議論に関して節を改めて展開することにしよう。

3 「厚生」の概念の由来を巡って

さて、問題の発端は、『富と厚生』の冒頭部分にて発見することができる。ピグーは、ムアの有名なフレーズ「善とは何であるか。私〔ムア〕の答えは、善は善であり、それでおしまいである。また、善はどのように定義されるか、と尋ねられるならば、私の答えは、それは定義できない、ということであり、それが私のいうべきことの全てである」¹⁵⁾を引用した後、すかさず次のように言明する。「厚生とは善と同じものを意味する。同様にそれは、分析されるという意味においては、定義され得ないものである。同時に、特定のものが厚生に属するか否か、どのようにそれらは属するか、について述べることは倫理学の主要な課題であると我々はいうことができるし、事実そうである。本書の目的にとっては、この課題に対しては二つの命題を定めておけば充分である。第一に、厚生は、様々な意識の状態のみを内包し、物質的な事物や条件等は含まない。第二に、厚生は大小の範疇の下におくことができる。厚生一般に関して、ここで述べる必要があることは、以上のことだけである」(WW, p. 3)と。「本書の目的にとって」とあるように、経済分析の論述であることから、ピグーは厚生概念について深くは立ち入っていない。尤も以上のような叙述だけでは、ピグーに対するムアの影響を十分に議論することは不可能であろう。何故ピグーは厚生を定義するにあたって、わざわざムアを引用したのであろうか。その理由が解明されれば、厚生概念の背後にあるピグーの思想的含意を汲むことが可能となるであろう。何れにせよ、以上の内容から、断片的であっても次のことが明らかとなる。先ず、善と厚生とは同一のものを意味する名辞であるということ。そして、ピグーはムアに倣って、善、厚生は、分析的には定義できないと規定していること、の二点である。ピグーの文脈においては、善と厚生に関する議論は表裏一体であり、善に関する議論及びその結論はそのまま厚生に関しても適用されるべきことを意味している。このことは極めて留意すべき事項であると思う。

以上の諸点を念頭に置きながら、以下において、先ず最初に「善」に関す

るピグーの倫理的議論の展開を追うことにする。彼が善に関して抱いていた観念が解き明かされなければ、善の観念と表裏一体の関係にある厚生の意味が理解されないからである。そして、善に関する議論の後に、厚生に関しても分析を施すことにする。

i) 善に関する議論

「倫理的論争における諸問題」において、ピグーはメタ倫理的な議論を展開している。倫理的に善という観念が関わってくる事項は、我々が目指すべき目的としてのそれ自身における善（これを通常、内在的善という）と目的を達成する手段としての善の二つである。ピグーが問題とするのは前者の内在的善である。これに関連してピグーは論争の三つの点を挙げる。第一点は、倫理的考察をするための方法に関する論争、第二点は、内在的善の内容を巡る論争、最後は、諸個人の善の対立と調和に関する論争である（PT, p. 80）。厚生議論に関係があるのは、最初の二点である。

第一の点について考察しよう。善とは何であるか、という倫理学の根本的問いに対し、それに答えるための、主に二つの方法があるとピグーはいう。一つは、事物の性質から演繹する先験的方法であり、もう一方は、直接的に認識する方法（直覚）である。前者の先験的方法を採る代表者は T. H. グリーンであるが、これに対してピグーは、「要約していえば、どんなものがそれ自体善であるかを決定するにあたり、先験的に決定する方法に関するあらゆる研究は、誤謬であり、退屈であると私には思える」（PT, pp. 81-2）と述べ、グリーンらの理想主義的倫理学の方法を退ける。

では、内在的善を決定するためにピグーが採用した方法は何であったか。ピグーはいう、「如何なるものが善であるかを認識する唯一の方法は、それを観照すること〔によって知る方法〕である。……、正しく、ある色が黄色であり、他の色が赤であることを認識するように、我々は、あるものが善であり、あるものが悪であるということを認識する。この方法こそが判断を可能に下す唯一の方法である」（PT, p. 82）と。この方法は、シジウィックのいう「何が為されるべきか、或いは何が意図されるべきかに関する即時的

判断」¹⁶⁾を下す方法であるところの直覚主義に他ならない。以上の叙述によって、ピグーは、メタ倫理学に関して、直覚主義の立場に立脚していたことが理解される。

ピグーが問題とする議論の第二の点に移ろう。第一の議論が、内在的善を規定する方法であるのに対し、第二の点は、内在的善の内容に関する問題である。

まずピグーは、内在的な価値(善さ)を持つものが、「意識的生の諸状態」(states of conscious life)のみであって、他の事物は一切持ち得ないか否かということを考察する。「……彼ら〔直覚主義者たち〕は——この点においては、私は彼らの弟子たちと意見を同じくする——現況の我々の知識において、意識的生の状態だけが善なるものであると声明する資格がある。この見解は、G. E. ムアと彼の重要な『有機的善』(organic goods)の学説〔有機的關係論〕を支持する論者たちによって議論されている。この学説は、実際ある意味においては、極めて尤もらしく見える」(PT, p. 83)とピグーは述べているが、ムアの学説には一点承服しえぬところがあるという。例えば、「美しい絵画を享受する」という状態を例にとって見ても、「享受する」という意識状態(主観)の善さに加えて、その絵画が実際に美を備えているという客観的条件も全体の価値に影響を与えるとムアは考えている¹⁷⁾。しかしながらピグーは、善さに対するこの客観的条件の貢献性を否定する。「より一般的にいうと、善さが、現行の経験の範囲内においては、専ら意識的生の状態にのみ依存する、という見解と有機的善の学説が対立する限りにおいては、私〔ピグー〕は有機的善の学説を拒否する」(PT, p. 83)。しかしながら、当のムア自身も「我々が知っているか、それとも想像し得るところの、群を抜いて最大の価値を持っているものは、ある意識状態である」¹⁸⁾と声明していることから、必ずしもピグーが、ムアの「有機的關係論」¹⁹⁾の全てを否定しているようには思われない。筆者の見るところでは、ピグーの展開する理論とムアの学説とは本質的な部分において極めて類似しているように思われる。以下では、ムアとの比較を念頭に置きつつ、ピグーの理論を展望してい

く。

内在的善は意識的生の状態からのみ成るということを規定したピグーは、続いて、どんな種類の意識的生の状態が善であるかを考える。しかし、これも意見の別れる難問である。ピグーは、十分に広い経験を以てあたれば、意識内の複雑に入り交じった要素を分解することが可能となり、我々の観念は、ある程度整頓され明瞭となるという。意識状態を形成する幾つもの要素に対して、その一つ一つを孤立化させて、それが全体としての意識状態の善さに対して影響を及ぼすか否かを内省する方法である。この方法は、ムアのいう「絶対的孤立化の方法」²⁰⁾と非常に似通っている。

ムアによると、どのようなものが内在的価値を有するかを直覚するために必要なことは、全体的一部分となっている要素を、直覚の対象としてただそれだけを孤立させ、他の要素と混合しないように注意することである。如何なる要素であっても、多くの場合は、単体では存在していない。それは他の多くの諸要素と共に、互いにある関係性を持ちながら存在して、全体を形成している。それ故、ある一つの要素の善さについて直覚しようとしても、それと相伴って存在する他の要素をも同時に直覚の対象に組み入れてしまい、当該の要素の善悪に関して正確に直覚することが不可能となるのである。

一般的な功利主義では、意識的状态の善さと関係するものは快樂の量のみであると主張されていた。論者によって、その唯一の要素が「親切」であるとか、「愛情」であるというように見解は多様であるが、「肝要な点は、これらの学派の何れもが、意識のあらゆる総合状態の内在的な善さ（必ずしも手段としての善さではない）が、たった一つの要素にのみ依存すると見做しているということに存する」(PT, p. 85) とピグーはいう。例えば、シジウィックは、意志や認識などの要素は究極的には快樂に資する手段的なものであり、快樂のみが唯一の内在的善であると結論している²¹⁾。この点を批判したムアは、快樂の意識が唯一の善ではないことを訴えた。これはピグーの追隨するところとなった。

ピグーは、例えば知能などは全体的価値に対して中立であるが、意識状態

の内に表象された快樂、親切、愛情は中立ではあり得ないとし、諸要素が積極的に単一の要素(快樂)に変換されることを否定する。無論これらに尽きるものではなく、目的達成に対する熱意や人間の理想などもピグーは挙げている(PT, p. 86)。

以上を承けて次のようにピグーはいう。「これまでに到達した結論としては、あらゆる意識状態の善さは、数学的表現を用いるならば、複数の変数〔先に挙げられたような快樂、親切、愛情、熱意など〕……から成る関数である」(PT, p. 87) と。従来の功利主義においては、変数が一つ(快樂)だけであったが、ピグーはムアの有機的關係論に倣って、多変数性を主張する。これをピグーの内在的善に関する関数的理論と呼んでおこう。但し、ピグーが論述しているように、「……満足が測定し得るものでなければ」ならない訳であるが、「或る任意の種類の大きさが測定し得るというのは、当該の大きさと基数との間に唯一の、相互的一致、一対一の関係が成立し得るという意味である。例えば長さの如き外延的大きさは一般にこの意味において測定することができるのである。快樂、満足、効用は内包的大きさであって測定することができない。それは一連の基数に相関させ得る種類のものではない」²²⁾。それ故、関数的理論といえども、厳密な説明というよりは寧ろ比喩的なものであり、直観的な理解を促すものに過ぎない。

続いてピグーは、「あらゆる意識状態における善の量が依拠する関数の性質について、一般的命題を何であれ規定することは可能であるか」(PT, p. 89. 下線引用者)と問う。この問いに対してピグーは幾つかの論点を考察するが、積極的に結論した点は次のことである。仮に全体的善を G 、ある要素を x 、他の要素を y としてそれぞれ表記すると、これらの間には以下のような関係が存する傾向にある。 $d(G/dx)/dy > 0$ 。つまり、ある要素 x による G の価値に貢献する度合いは、他の要素 y が介在することによって、一層強化されるということである。例えば、 x =幸福、 y =徳などの場合が相当するとピグーは考える(PT, p. 89)。そして、この点が、ムアの有機的關係論との関わりからして最も着目すべき点となるのである。

そもそもムアのいう有機的關係とは、全体を構成する諸部分が各々持っている内在的価値を単純に合計しても全体の価値とは一致しないという関係が、全体とその諸部分との間に存することを指しているのである。「……〔例えば〕これらの情感は、それらを部分とする全体に、それらが自ら所有している価値よりも遥かに大きい価値を与える〔貢献する〕ことになる。これらの高度に価値のある全体を形成するために、これらの情感と結合されなければならない認識的要素についても、同じことが明らかにあてはまる」²³⁾。

今、仮に全体が A と B とから構成されていると考えて、 A 、 B の内在的価値をそれぞれ、 $V_A(A)$ 、 $V_B(B)$ と表記し、全体の価値は $V(A, B)$ で表すことにしよう²⁴⁾。有機的關係論は、 $V(A, B) \neq V_A(A) + V_B(B)$ 、つまり $V(A, B) > V_A(A) + V_B(B)$ という場合もあれば、 $V(A, B) < V_A(A) + V_B(B)$ という場合もあるということを主張する。だが一体どういう原理が働いてかくのごとき結果が生じるのか。ムアの叙述においては明瞭には説明されておらず、ただ「有機的關係」があるからだと述べられているに過ぎない。先に論及したピグーの関数的理論は、この問題に対して一つの解釈を提供してくれる。

ある要素が加えられることによる直接的チャンネルを通じて全体の価値が増加することに加えて、要素の加入により、他の要素の全体の価値に対する影響力が改善されるという間接的チャンネルを通じても全体の価値が増加する。仮に、 $V_A(A) = 2A$ 、 $V_B(B) = 2B$ だとして、全体の価値 V を、例えば $V(A, B) = (2+A)B + 2A$ というように想定しよう。 A と B を共に内包した全体の価値は単純に $V_A(A) + V_B(B)$ ではない。但し、どちらか一方、例えば B 、の要素が全く含まれず、全体がただ一つの要素 A から成る全体であれば、当然にも $V(A, B) = V_A(A)$ ($\because B=0$)、となる。全体の価値 $V(A, B)$ における $\Delta V / \Delta B = 2 + A$ は、 A (>0 である場合) が関わることで、単独の場合の関数における $\Delta V_B / \Delta B = 2$ よりも大きくなるということがピグーの主張するところである。 $A=0$ 、 $B=2$ ならば $V=4$ であるが、 $A=1$ となって増加すると、 $V=8$ となり、 $\Delta V=4$ となる。これは A の直接のチャンネルを通じた貢献量 2 を上回る。これは B の係数(影響力)が増加したためである。以

上に関する具体例を用いた説明は、後の厚生議論において行うことにしよう。

以上の考察を踏まえて、ここでムアとピグーとの比較における幾つかの重要な点について総括しておきたい。

ある事物が単体でどれだけの内在的価値を有するかを見定めることに加えて、手段としての善と内在的善とを峻別する方法がムアのいう絶対的孤立化の方法である。ムアはこの方法を探ることによってのみ両者を正しく峻別できると考えている。従来の快樂主義者たちは、内在的善はただ快樂のみであり、他のものは一律にそれに対する手段としての善であると規定していたのである。快樂以外のものが果たして、手段という従属的なものに過ぎないのか、それともそれ自身において価値ある内在的善であるのか、この問題に対する解答如何により、快樂主義であるか、それとも非快樂主義であるかが自ずと決定されるといい良い。先の孤立化の方法を用いてみるならば、何らかの価値を有しているように見えるものであっても、それが手段としての善であると判明した場合は、それには何ら内在的な価値が無いと結論される場合もあり、逆に一見して手段としての善のように思えるものであっても、孤立化の方法で調べてみれば、手段としてのものではなく、それ自身において価値あるものであることが判明する場合もあるという²⁵⁾。ムアの見るところによると、シジウィックは、孤立化の方法を正しく用いなかったために、後者の認識において誤りを犯した。即ち、内在的に価値ある諸々の事物に対して、それら全てを快樂への手段として見做し、従って快樂が増加しない限りにおいては、それらの要素は価値に対して何ら資する性質を持たない、と誤断したというのである。

一方、ピグーは、「知能」等は内在的価値に対しては中立であると考えている。「しかしながら、それ自身においては、その効果だけを抽出して〔孤立化させて〕考えてみるならば、知能は、……状態の善さに対して、影響を与えることはない」ことから、それは善に対する手段であるとピグーは規定する(PT, p. 86. 下線引用者)。先にも述べたように、ムアは、従来の倫理

学に見受けられる重大な誤りの一つとして、手段としての善と内在的な善とを混同することにより、誤った価値判断を犯すことを挙げている。ピグーはこのことに対して特に注意を払っていたのである。

さて、以上の考察に基づき、ピグーの関数的理論に関しては、次のように結論することができる。先ず第一に、関数の変数、即ち意識的生の状態全体を構成する諸要素のうちには手段としての善は含まれない。つまり、諸要素の持つ属性は、手段的な善さではなく、内在的な善さである。「……仮に〔例えば〕この欲求が、それ自身において〔内在的に〕善であるかまたは悪であるとすれば、その欲求が強まると厚生〔意識状態全体の価値〕は変化するであろう」(WW, p. 5)。先の関数的理論が示すように、全体を構成する幾つかの要素の中で、仮に任意の一要素を除いて他全ての要素がゼロであれば、全体の内在的価値は、必然的に当該の一要素が有する価値(善さ)を示すものとなるからである。よって、ピグーの想定する意識的生の状態全体は、それ自身内在的価値を持つことに加えて、その各構成要素もそれぞれ内在的価値を有するという、いわば二重の価値構造となっている。内在的価値を有する要素が構成されて、それらがまた全体としての価値を創出するという観念は、ムアの倫理学体系の要の一つともいえるものであるが、ピグーが思念した倫理的観念もムアと全く同様であったと理解できる。

ii) 厚生に関する議論

さて、ピグーによる善に関する倫理的議論の展望を一応終えて、以下では厚生に関する考察を展開しよう。

先述したように、ピグーは、「厚生とは善と同じものを意味する。同様にそれは、分析されるという意味においては、定義され得ないものである」と述べ、ムアによる善の定義不可能性に倣い厚生の定義不可能性を主張する。分析されるという意味において定義不可能であるとは、厚生も、善と同様に、それ自身のうちに何ものも含まない単純観念であるので、それ以上分割できないことを意味する。但し、注意しなくてはならないことは、定義不可能であるのは、善並びに厚生という性質であって、善なるもの(善という性質を

有するもの), 厚生なるものに関しては規定することが可能であるということである。事実ピグーは、厚生なるものは、意識の諸状態のみを内包すると規定している(WW, p. 3)。これは、先にピグーが、善なるもの(内在的善)を意識の諸状態であると規定したものと全く同様である(PT, p. 83)。全体としての善は、多くの部分から成る有機的善であるというムアの説をピグーは考慮し、しかも善と厚生は同一のものを意味すると言明していることから、厚生全体も、やはり複数の諸部分から成る有機的な全体であるということになる(関数的理論)。先に、ピグーの文脈においては、善と厚生に関する議論は表裏一体であり、善に関する議論及びその結論はそのまま厚生に関しても適用されるべきことを意味している、と筆者は述べたが、その真意はこういうことに存するのである。

その結果、経済的厚生と厚生全体との関係はどのように説明されるのだろうか。続いてこれを考察することにしよう。

ピグーによれば、厚生一般のうち、経済的厚生はその一部分である。それは所得の獲得と消費の態様に関連して生じる厚生を全て含む訳ではなく、所得の獲得と消費に、間接的に関連する様々な(厚生の中の)要素は経済的厚生には含まれない。つまり、「[所得の獲得と消費に関連して影響を受ける]我々の意識の全ての精神的帰結を包含するのではなく、ただ満足に関係する精神的帰結のみを経済的厚生は包含する」(WW, pp. 3-4)のであり、更に厳密に言えば、それらは「満足、不満足のある限られた一群に過ぎない」(EW, p. 14; 邦訳, p. 17)とピグーはいう。従って、経済的厚生とは、厚生全体を形成する一要素である満足の意識のうち、経済的原因によって影響を受ける部分をいう、と規定することができる。

更に、次の事柄は重要である。それは、相等しい満足が、相等しい厚生を表すとピグーの文脈において想定されているというホートレーの批判に対して、ピグーが反論する内容である。「我々は共に[満足の]質の差異を考慮に入れているのである。二つの等しい満足のうち……二つの満足が、満足そのものとしては善さを等しくするが、これを享受する人々の質に対する反作

用としては善さを異にする」(EW, p. 18; 邦訳, p. 22. 下線引用者)²⁶⁾。ピグーは満足に関して、質の相違を明らかに認めている。

かくして有名な経済的厚生と非経済的厚生との対立、不調和とは、ピグーの関数的理論に即して説明を試みると次のようになる。

単純化のために、経済的厚生（満足の意識の一部）の要素のうち、質の高いものを A_h 、低いものを A_l と表記し、非経済的厚生の要素（その他のあらゆる意識状態）を説明の便宜上一つに集約して B と表記する。つまり厚生全体の全要素が A_h, A_l, B だと想定する。そして経済的厚生の内在的価値を $W_A(A_h, A_l)$ 、非経済的厚生の内在的価値を $W_B(B)$ 、厚生全体の内在的価値を $W(A_h, A_l, B)$ と表記する。上記の引用の如く、「反作用としては善さを異にする」、 $\Delta(\Delta W/\Delta B)/\Delta A_h > 0$ 、 $\Delta(\Delta W/\Delta B)/\Delta A_l < 0$ という関係性がある場合、状況によっては、 $W(A_h, A_l, B) < W_A(A_h, A_l) + W_B(B)$ という帰結が生じ得る²⁷⁾。先の有機的関係論からいうと、厚生全体としての価値が、各構成要素の持つ諸価値を合計したものよりも劣ることになってしまうのである。ピグーの例証に準ずると、賭博、アヘン等の満足が A_l に相当し、文学、芸術等における満足が A_h に相当する (EW, p. 18; 邦訳, p. 20)。数式で説明したように、両者は倫理的な反作用としては善さを異にするので、満足以外の意識 B （例えば審美や奉仕の精神等）の持つ厚生全体の価値に対する影響力は、 A_h が増加すれば改善され、逆に A_l が増加すれば改悪されるのである。従って、満足の多い意識状態が少ない意識状態よりも「善い」とは限らない²⁸⁾、ということの含意は、たとえ量としてはより多くとも、それが低品位の満足であれば、高品位のそれであった場合と比較して、厚生全体としての価値は劣るということである²⁹⁾。

4 結論

以上の考察から次のように結論することができる。先ず、冒頭で提起した問題と対応させていうと、ピグーの採用した倫理学的立場とは、メタ倫理学（方法）として直覚主義を採用し、規範理論の次元においては、非快楽主義

を採用したものである。彼は快楽を唯一の善とは見做さず、善を複数の要素から成る全体として捉えていた。これはムアの有機的關係論から影響を受け、批判検討し、ピグーが善の関数的理論として独自に修正を加えた理論である。そしてピグーは、上記の倫理的議論を基礎として、善と厚生 of 観念を同一なものと規定し、厚生経済学において善に関する議論と全く同様である厚生 of 議論を展開した。そこにおいては、新たに、経済的厚生と非経済的厚生との調和、不調和というピグーの厚生経済学におけるユニークにして基礎的な問題が幾つかの例を基に考察されているが、これは先の関数的理論を応用させた論述であり、その理論の知識無くしては十分に真意を理解することが困難であるといえよう。

そしてピグーの体系においては、効用、厚生は、それぞれ全く別の次元から説かれた概念であり、経済学的解釈においてしばしば見受けられるように、効用と厚生は同義であるとか、効用が発展して厚生となった、という解釈の仕方は誤りである。本論で論述したように、ピグーが効用に関して考察するようになった経緯は、当時の経済学的論争を鑑みてのことであった。シジウィック倫理学の影響を受けたピグーは、それまでは同一視されがちであった欲求と快楽とを峻別し、欲求に基づいた効用の定義を提示した。しかしながら効用自体を取って見れば、それは、欲求の強度を意味する単なる代替的な名辞に過ぎず、厚生の場合とは異なり、善や内在的価値といった観念と直接的には関係づけられていない。その後、ムアの倫理学に影響されて展開したピグーの善に関する倫理的議論こそが、厚生 of 概念の哲学的源泉であり、その本質は経済学とは無縁である。それぞれの概念が形成された土壌は、元々互いに独立したものであった。

- 1) 例えば、T. W. Hutchison, *A Review of Economic Doctrines 1870-1929*, Oxford, 1953 (長守善・山田雄三・武藤光朗訳『近代経済学史』上下巻 東洋経済新報社, 1957年); U. H. Myint, *Theories of Welfare Economics*, Cambridge, Mass, 1948.; M. G. O'Donnell, "Pigou: An Extension of Sidgwickian Tho-

- ught", *History of Political Economy*, 11 (4) Winter 1979.
- 2) Y. Shionoya, "A Non-Utilitarian Interpretation of Pigou's Welfare Economics", P. Koslowski and Y. Shionoya (eds.), *The Good and the Economical*, Springer-Verlag, Berlin, 1993.
 - 3) A. C. Pigou, *The Economics of Welfare*, 4th ed. Macmillan, London, 1950 (永田清監訳『厚生経済学』東洋経済新報社, 1953年). 以下, *EW* と略記する.
 - 4) 伝統的な効用の定義に関しては, 本稿では詳細に論じることができないが, 以下の文献を参照されたい. J. Griffin, *Well-Being*, Clarendon Press, Oxford, 1986, pp. 7-20; G. J. Stigler, "The Development of Utility Theory", *Journal of Political Economy*, August and October 1950.
 - 5) A. C. Pigou, "Some Remarks on Utility", *Economic Journal*, 13, 1903, pp. 58-68. 以下, *SRU* と略記する.
 - 6) A. Marshall, *Principles of Economics*, 9th ed. Macmillan, London, 1961, p. 76 (馬場啓之助訳『経済学原理』東洋経済新報社, 1975年, p. 98).
 - 7) この根拠として, ピグーは, シジウィックによる次の言明を拠り所としている (*EW*, p. 24). 「快楽を維持, 産出する傾向を持つ行為を促す意志に対して, その意志を助長することに快楽が影響を及ぼす強度に正比例して, 快の量が多または少となる, とは私は思わない」(H. Sidgwick, *The Methods of Ethics*, p. 126. 註の9を参照). 「直接の満足の強度は, 先行する欲求の強度に常に比例すると仮定すべきであるとは考えない」(H. Sidgwick, *Lectures on the Ethics of T. H. Green, Mr. Herbert Spencer, and J. Martineau*, Macmillan, London, 1902, p. 340). これらの含意は次のとおりである. 確かに, 未来において生じる帰結的快楽の量に関して, その予測に失敗する可能性が我々に付きまとうことから, 帰結的快楽の強度と欲求の強度とが比例するとはいえない. また, たとえそうした予見において誤りが無いと仮定したとしても, やはり快楽の強度と欲求の強度とが比例するとはいえない. つまり, 快楽の強度を測る指標として欲求(の強さ)を用いることは不可能である. 何となれば, 我々の欲求の対象は快楽にのみ限定されておらず, 多様なものを欲求対象とすることから, 欲求充足によって必然的に快楽が帰結として生じる訳ではないからである.
 - 8) J. S. Mill, *Utilitarianism*, 1861, *Collected Works of John Stuart Mill*, Vol. X, University of Toronto, Toronto and Buffalo, 1969, p. 237 (伊原吉之助訳『功利主義』世界の名著『ベンサム・J. S. ミル』中央公論社, 1967年, p. 501).
 - 9) H. Sidgwick, *The Methods of Ethics*, 7th ed. Macmillan, London, 1907.
 - 10) satisfaction という語はピグーの文脈においては, 二通りの意味に解釈され

ている。一つは、快樂と類似した感情としての「満足」(satisfaction)であり、他方は、欲求を充足するという実践的な意味の「充足」(satisfaction)である。本文においてはそれらのことに注意して訳し分けておいた。

- 11) ビグーは, "Review of Willoughby's *Social Justice*", *Economic Journal*, 11, 1901, において, 従来の功利主義者(ペンサムやミルたち)とシジウィックとを倫理学的観点から区別し, シジウィック倫理学を支持している。ペンサム, ミルに関して異なる解釈について, 邦文文献では, 例えば, 内井惣七『自由の法則利害の論理』ミネルヴァ書房, 1988年を参照せよ。
- 12) G. E. Moore, *Principia Ethica*, Cambridge University Press, Cambridge, 1903(深谷昭三訳『倫理学原理』三和書房, 1977年)。
- 13) A. C. Pigou, "Some Points of Ethical Controversy", *International Journal of Ethics*, October 1907. 尚, 同論文は A. C. Pigou, *The Problem of Theism and Other Essays*, Macmillan, London, 1908に収録されている。引用には後者を用い, PTと略記した。
- 14) A. C. Pigou, *Wealth and Welfare*, Macmillan, London, 1912. 以下, WWと略記する。
- 15) G. E. Moore, *op. cit.*, p. 6(邦訳, p. 8)。
- 16) H. Sidgwick, *op. cit.*, p. 97。
- 17) G. E. Moore, *op. cit.*, pp. 194-5(邦訳, pp. 251-3)。
- 18) *Ibid.*, p. 188(邦訳, p. 245)。
- 19) *Ibid.*, pp. 27-36(邦訳, pp. 35-47)。
- 20) *Ibid.*, pp. 92-4(邦訳, pp. 120-2)。
- 21) H. Sidgwick, *op. cit.*, pp. 395-7。
- 22) A. C. Pigou, "Some Aspects of Welfare Economics", *American Economic Review*, 41 June 1951, p. 289。
- 23) G. E. Moore, *op. cit.*, p. 191(邦訳, p. 248)。
- 24) 関数的に考察するので, 厳密ではないが, 仮想的に内包の大きさを外延の大きさに変換して扱う。例えば, より強く満足を感じる場合, 満足の要素は数値としてより大である, というように想定する。尚, 要素によって関数形が異なるのは, 「孤立化の方法」により, その要素だけを独立に評価しなければならないという理由に因る。
- 25) G. E. Moore, *op. cit.* pp. 84-5, 187(邦訳, pp. 109-10, 243)。
- 26) 絶対的孤立化の方法により, 単体での内面的価値としては優劣が無いと見做されたとしても, 他の諸要素との関係を含めた全体という観点から内省した場合

には、何らかの相違が存し得る、ということはこの引用は含意している。

27) 例えば, $W_A(A_h, A_l) = 2A_h + 2A_l$, $W_B(B) = 2B$, $W(A_h, A_l, B) = (2 + A_h - A_l)B + 2A_h + 2A_l$ のような場合を想定されたい. $\Delta(\Delta W / \Delta B) / \Delta A_h = 1$, $\Delta(\Delta W / \Delta B) / \Delta A_l = -1$ であることから, 低品位の満足 A_l が相対的に多ければ, $W(A_h, A_l, B) < W_A(A_h, A_l) + W_B(B)$ となる (有機的關係).

28) A. C. Pigou, *op. cit.*, p. 288.

29) 上述したケースは, ある経済的原因が経済的厚生に影響を与え, その経済的厚生の変化に伴って生じる派生的効果に関する問題であった. これに対して, ある経済的原因が経済的厚生と非経済的厚生との双方に対し直接影響を及ぼし, その結果後者に対しては負の影響を与え, 不調和を来すケースも考えれるが, これに関しては特に説明の必要が無いであろう.

[1999 年 11 月 9 日 受稿]
[1999 年 12 月 17 日 受理]

(一橋大学大学院博士課程)